

強いチーム創りの着眼点

経営者の『考え方』でチームの強さは決まる！

今回は、稲盛和夫さんの経営哲学を紹介することから、強いチーム創りの着眼点を解説する。稲盛さんは、著作『心を高める、経営を伸ばす』の中で、次の経営哲学を述べられている。

『人生・仕事の結果＝考え方×熱意×能力』

この公式は、平均的な能力しか持たない人間が偉大なことをなす方法はないだろうかという問いに、私が自らの体験を通じて答えたものです。

能力とは、頭脳のみならず健康や運動神経も含まれますが、多分に先天的なものです。しかし、熱意は、自分の意志で決められます。この能力と熱意はそれぞれ0点から100点まであり、それが積でかかると考えると、自分の能力を鼻にかけ、努力を怠った人よりも、自分には頭抜けた能力がないと思って誰よりも情熱を燃やして努力した人の方が、はるかに素晴らしい結果を残すことができるのです。

そして、これに考え方が加わります。考え方とは、人間としての生きる姿勢であり、マイナス100点からプラス100点まであります。つまり、世をすね、世を恨み、まともな生き様を否定するような生き方をすれば、マイナスが掛かり、人生や仕事の結果は、能力があればあるだけ、熱意が強ければ強いだけ、大きなマイナスとなります。

素晴らしい考え方、つまり人生哲学を持つか持たないかで、人生は大きく変わってくるのです。

この稲盛さんの経営哲学に触れると、いつもドキッとさせられる。この方程式に共感することはできるが、プラス100の考え方、マイナス100の考え方とはどんなものなのか、想定することは意外に難しい。もちろん、昨今報道されているコンプライアンスに違反した数々の経営問題がマイナス100であることは当然であるが、日常業務での考え方の善し悪しを指導するとなると困るのではないだろうか。

朝日新聞に掲載された日野原重明さんの『あるがまま行く』にそのヒントがあるので紹介する。

19年前の1984年、アメリカの医学誌に載った「症例」を忘れられません。それには、私もはっとさせられたのです。その症例はこうです。三世代が一緒に暮らしている家族の中の一人である「彼女」はしゃべることも、話しを理解することもできません。しかし時々、何時間もとりとめもなく片言で話し続けます。「彼女」は人や時間、場所などはわかりませんが、自分の名は認識しているようでした。歯がないので食べ物は流動食か半流動食で、食べることも入浴や着替えも、他人に頼りきりです。しかも、尿も大便もおむつでしたから、着替えや入浴を頻繁に行わなければなりません。「彼女」のシャツにはよだれがついていて、歩けません。睡眠も不規則ですから、夜中に大きな声をあげて周りの

者を起こしました。しかし、ほとんどの時間、「彼女」はとても人懐こく、幸せそうでした。

この症例について、その医学誌に載っていた「実験」と同じように、私も看護学生の前で読み上げたことがあります。学生たちに「彼女」の世話をすることをどう感じますか、と尋ねたところ、「挫折」「絶望的」「気がめいる」などの言葉が返ってきました。「彼女のような状態をあなた方も経験していますよ」というと、皆、信じられないという表情をしたのです。そこでようやく「彼女」の写真を回覧しました。すると、学生たちの中からどっと笑いが起こりました。「彼女」は生後6ヶ月の赤ちゃんだったのです。

私は問いかけました。症状は同じなのに、どうして90歳の老人のケアは赤ちゃんより難しく、絶望的なのだろうか、と

考え方で世界が一変する、誠にわかりやすい事例ではないだろうか。毎日同じことの繰り返しで辟易としている社員に、どのような考え方指導をすべきか、日野原さんに習って考えてみてはいかがだろうか。

各企業にとって考え方の原点になるものは何か？その答えは、経営理念である。今回は、強いチームを作る上での土台となる経営理念について論ずる。

株式会社アッシュ・マネジメント・コンサルティング 顧問 平堀 剛